広報 水巻

12月3日（1966）

■No. 231■

毎月1回各家庭に配布

発行所　福岡県遠賀郡水巻町役場　発行人　西尾　司　編集人　広報編集委員会（企画室内）　印刷所　冷牟田印刷合資会社　電話（代表）㊀0536

町の人口
（41.10月末現在）

人口	30,356
男	15,113
女	15,243
世帯数	6,966

前月との比較
人口－222　世帯－95

年末年始の役場事務

役場は12月28日が公務納め。1月3日まで業務を休ませていただきます。この間、当直者が簡単な事務はいたしますが、印鑑証明、戸籍謄本など諸証明の交付ができません。これらのことはぜひ28日までにお願いします。

交通事故 町民の総力結集を

交通戦争はますます激しく、人身事故もいぜん増加しています。

特に年末年始の時期には輸送力の増大、歩行者による混雑その他の悪条件が重なり、例年、飲酒等による悪質事故や歩行者事故が激増します。

交通事故をなくす福岡県民運動本部では十二月一日から一月十五日までを「年末年始交通安全運動月間」とし、強力に交通安全運動を推進します。

各家庭でもこの運動の主旨をご理解いただき、交通暴力の追放に総力を結集しましょう。

「のんだらのるな　のるならのむな

交通悪の中でも飲酒運転は横綱格。❶飲酒したら絶対に運転しないこと。❷飲酒したら絶対に運転させないこと。❸運転中の者には絶対に酒を提供しないこと。この三点を運転者はもちろん、各家庭でも注意をし、事故のもととなる飲酒運転を絶滅しましょう。

「ブレーキは早目に　スピードは控え目に

年末年始の交通混雑が激しいときに、スピードの出し過ぎや無理な追い越しは事故に直結します。安全運転の励行を……。

「危険です　路上の遊び立ち話

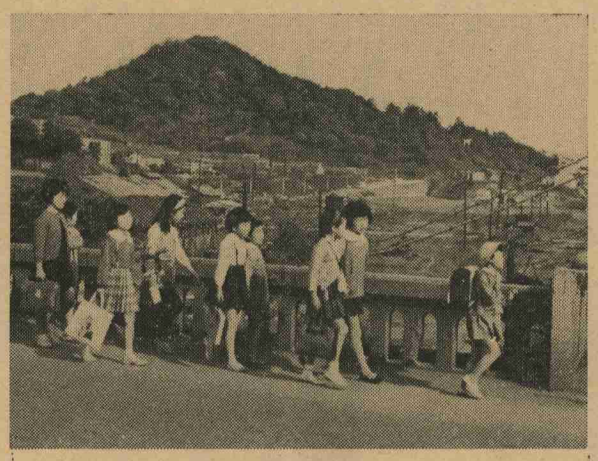
路上での遊びや道路への飛び出し、危険な道路のひとり歩きも事故の原因です。幼児、老人、身体障害者の道路歩行に際しては、必ず保護者が付添うよう各家庭で注意しましょう。

「もう一度よく見て　渡れ手をあげて

右側通行、歩道通行、横断歩道・人道橋など安全施設の利用、信号厳守など、安全な歩行や正しい横断の仕方がみなさんを交通事故から守ります。歩行者も交通道徳を守り、身を守りましょう。

「お父さん、無理な追越ししないよう

各家庭では、家遊の外出時に必ず交通安全についての、「愛のひと声」をかけるよう習慣づけましょう。交通安全に各家庭で愛のひと声運動を……。

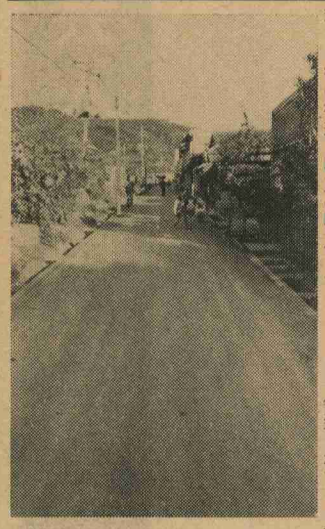


正しく歩道を歩くよいこたち。
斜め横断などは事故のもと

生活環境の整備に
足もと道路の舗装すすむ

町では、住民のみなさんの日常の生活に直接利用されている「足もと道路」の整備に力を入れていますが、九月に舗装された樋口～折尾線につづき、こんど新生街の和田～鶴の後線、頃末の頃末～先園線の舗装も完成しました。

和田鶴の後線は延長百五十メートル、巾四・五メートル、頃末～先園線は延長百メートルで巾三メートルで両線ともアスファルトコンクリート舗装されています。



舗装された新生街、
和田～鶴の後線

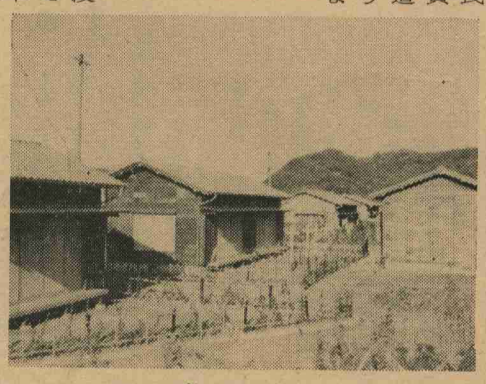
これらの道路は、町民のみなさんが通勤に、買物に、毎日利用される道路で、住みよい街づくりに役立つことと思います。

町営住宅も完成
（四十一年度）

住宅問題解消の一手段として、猪熊に建設中であった町営住宅四十一年度計画分二十戸が、十一月末に完成しました。

内訳は一種（三七・五平方メートル）八戸、二種（三一・二平方メートル）十二戸で、公正な抽選の結果、入居者も決定しました。

需要がますますふえている住宅問題解消には、県住の誘置とともに、来年度も町営住宅建設の計画が予定されています。



節度ある社会生活のために
人権の尊重を

十二月十日は、国連総会で世界人権宣言が採択されてから満十八年の記念日にあたります。

しかし、今なおみだりに公開すべきでない他人の私事をあばいたり、事実に反するうわさを流したりの、個人の名誉、信用を侵害するようなことが少なくありません。

節度ある社会生活が営なまれるよう、お互の人権を尊重しましょう。

町税などは納期内に…
納税相談に応じます

近ごろ町税などで、納期内に納められない件数がふえ、納期後に発付する督促件数がたいへん増加しています。

町税は、納期内に納めないと督促手数料や延滞金などが加算され、納税者の方にも不利益になります。町税などは納期内に納めるようにいたしましょう。

町税などの納期は下の表のとおりです。自分に関係のある税や使用料の納期は覚えておきましょう。

納税相談のご利用を

税を滞納すると納付催告書によって催告納期限が定められ、この期限が過ぎると、差押えが行なわれます。このようなことにならないよう。どうしても期限内に納税ができないときは、滞納になる前に納税相談においでください。それぞれの事情に応じて、税を分割して納める方法、納期を延期する方法などの相談に応じます。

納税組合のご利用を

仕事や家庭の事情で役場や遠賀信用金庫・福岡銀行に税などを持参できない方は、納税組合に加入されると便利です。

納税組合長のところまで持参すると、納期までにまとめて納入されます。各地区の納税組合にご加入ください。

税目	第1期	第2期	第3期	第4期
町県民税	6月1日～6月30日	8月1日～8月31日	10月1日～10月31日	1月4日～1月31日
国民健康保険税				
固定資産税	4月1日～4月31日	7月1日～7月31日	12月1日～12月24日	2月1日～2月28日
軽自動車税		（随時）		
住宅使用料	各月			
水道使用料				
共済掛金	水稲	8月1日まで		
	麦	12月1日まで		
生活資金償還金	各月			

競売公告

左記のとおり競売を行なうので、国税徴収法第九十五条の規定により公告します。

一、公売財産の名称及び数量
会席膳二十個、重箱（四段重）一組、吸物茶碗（蓋付二十九個）木皿（大九個、小三十六個）

二、公売の方法
せり売り

三、公売の日時、場所
昭和四十一年十二月十四日午前十一時　水巻町役場別館

四、買受代金納付の期限
昭和四十一年十二月二十日午前十一時まで

五、買受人の資格
なし

「歳末たすけあい運動」
12月15日まで　御協力ください

町社会福祉協議会では、現在、みんなで明るいお正月を、を合いことばに「歳末たすけあい運動」を実施し、生活に困っている人も、みんながそろって明るいお正月を迎えられるように、町民のみなさんのあたたかい心による義援金や物資のご寄付をお願いしています。

この義援金・物資は、正月を前に生活に困っておられる人々に配ばられます。

みなさんのあたたかい心を、おまちしています。

一、種類
㋑義援金
㋺物資（日用品おもに衣類）

二、送り先
水巻町頃末　水巻町役場内
水巻町社会福祉協議会あて

三、期間
十二月十五日まで

無料 心配ごと相談
12月12日　町民会館

日常生活の中で就職、内職、子供の問題、金銭の貸借、土地、家屋の問題、家庭内のいざこざなどで自分だけで解決がつかず、といってこれらの問題をうちあけて相談する適当な人もなく、一人で心配している方がおられることと思われます。

こんな方のために「無料・心配ごと相談」がつぎのとおり開催されます。ご遠慮なくお気軽にどうぞ―。

一、日時　十二月十二日　午前九時半～三時

二、場所　町民会館日本間

三、相談内容

1生活相談
ア、更正相談
イ、年金・保険関係

2生業相談
ア、就職関係
イ、内職関係
ウ、生業資金

3法律相談
ア、民事人権関係
イ、児童保護関係
ウ、身体障害者関係
エ、家庭紛争関係

どんなことでもお気がるに

主催　水巻町社会福祉協議会

量目は正しく
12月は
正量取引強調月間
消費生活の合理化に
正しく確かな量取引を

「たばこ」は町内で買ってください。

「たばこ」からの税金は町の財政を支えています。

「たばこ」を買うときは、町内で……。

毎月第三日曜は 家庭の日
12月は18日

「家庭の日」は青少年を中心とした一家だんらんの楽しい一日をすごしましょう。

水巻まつり 文芸入選作品発表

水巻町制施行十周年を記念して、昭和二十六年に始められた「水巻町文芸作品募集」も十六年目、今年も〝水巻まつり〟行事の一つとして募集され、多くの応募作品を得ました。
これらの作品は、いずれ町公民館発行の「蟻塚」に収録発表されますが、ここに入選作品の一部をお知らせします。

自由詩

第一席

私たちの年輪

下二町住　今井久之

妻よ　心から愛する妻よ
ともすれば空虚が漂白し
単純でカビの生えそうな毎日から
開放されるために
大声でうたおう
それは
ただれた社会に
押し流がされる私たちを
受けとめてくれる
偉大な武器となろう
だから造られ飾られた城よりも
風雪に耐え忍んで
みすぼらしくもなお
くずれまいとする城をうたおう
だから巨大なビルよりも
その影にかくれ
吐息しながらも
生きようとする風景をうたおう
チッポケな二人だけど
私たちの
ほとばしる鮮血でもって
眠った石ころをよみがえらせ
澄んだ子どもの眼と
躍動する太陽の中で
大木の威風でなく
それを形成している粒子を
うたいつづけ
私たちの年輪としよう

第二席

どんなおだやかな ダ暮れにも

猪熊町住　佐藤ゆきの

夏日の照りつける
沈黙の午後にも
おだやかな水煙にけむる
夜の闇の中にも
地上はいつも
悪意に満ちて
人々の魂の
一番弱々しいところを
ねらっている
あなたをつれていこうとする
ミノトールは
嵐の日に目覚め
みぶるいをして立ち上がる
ぶあつい既足の足の
毛むじゃらな肌の下に
磨きすまされた
爪が隠れている
いそいで服を着ておくれ
ミノトールは
あなたのかわいらしい叫び声が
大好きなのだ
どんなおだやかな夕暮れがきても
地上に住む
人の心の嵐は止まないのだ
ミノトールが起きないうちに
足音をしのばせて
できるだけいそいで
わたしのところにおいで
吾子よ

佳作

忘れられていた雨

梅ノ木区　松井ひろみ

忘れられていた雨が
プラタナスの樹をぬらした
――九月――
純朴の影で
片想いのわびしさを
唱いつづけてゆく私の雨よ
夏の終り　忘我の中をかけめぐった　悲しみの代償よ
つめたいしずくのその中で
無言のうちに
多くのことを思い出させ
速度を増していく
――九月――
忘れられていた雨よ

佳作

漂白された人間像

増永　龍之

政治が政治屋の玩具となったとき
群衆は寝虫の中で
猿轡をはめられる
あわれな群衆を
無視するものは誰か！
誰でもない
それは人間！
税金という尨大な遊興費
群衆は濁ったうつるな瞳で
虫籠のふし穴から
おどおど覗きみしている
貪婪な夜の饗宴の色彩りを
政治屋のあやつり糸は
群衆に向けられた挑戦の銃先
怒りを失った蟾蜍の切先は
ボロボロと刃こぼれし
そこに残されたのは
漂白された人間像！

選評　白石貞輔先生

自由詩は、すべて高い水準をゆく作品でしたが、熟考の末この四編を選びました。
「私たちの年輪」は、その素直な素朴な人生への態度にうたれた。ほのぼのとした安らぎがある。
「どんなおだやかな夕暮れにも」は、最後の「吾子は」でぐっときた。親の愛情が詩というヴェールにつつまれて、しみじみとした雰囲気をつくっている。
「忘れられていた雨」は九月という季節感がよくでているし、よく締り、まとまっている。
「漂白された人間像」は創造的ないい題である。思想がやや露骨すぎる点があるが、おしつけがましくないのがよい。

小説随筆

第一席小説
「時鳥」
古賀区　石松　琅外

第二席小説
「秘聞小松内大臣山物語」
高松区　田中　惟治

佳作随筆
「吉川英治と川柳」
宗像郡宗像町　吉武邦利

佳作随筆
「追憶」
頃末奥　三好福美子

選者　白石貞輔先生

児童詩

【小学生の部】

第一席

下二小二年　かわまたのぶゆき

せんぷうき

せんぷうきが　ぐるぐるまわると
せんぷうきの　はねが　小さく見える
せんぷうきが　下を　むいて
ぐるぐる　まわると　ごみが　とぶ
せんぷうきの　風が　ふうりんに
あたると
ふうりんが　チリン　チリン　なる
せんぷうきが　右や　左を　むくのを
みていると　ぼくの　目が　まわりそうだ

第二席

下二小六年　針本永吉

みそしる

朝はやく起きてみると
かあさんが
みそしるを作っていた
なべにだしをいれた
ブクブクとふっとうする
つぎにねぎとみそをいれた
いいにおいがした
みんなが起きて
おぜんにつく
ぼくは
かあさんが
ついでくれたみそしるを
ひと口のんでみた
とってもおいしかった

第二席

猪熊小四年　高島継男

お金と、おさけ

13日は　きゅう料日
おかあさんは　きゅう料日に
毎日　たくさん　お金を使い
すぎるとおとうさんにいわれた
おかあさんは
げっしゃや　食べ物に　お金が
いるから　と　おとうさんに
いった
おかあさんが　おとうさんに
向って　いった
おさけや　たばこの　お金もい
るから
ぼくは
おかあさんが　おとうさんに
おさけやたばこを　やめてほし
いと
ゆうかと　思っていたのに
おかあさんは　ゆわなかった
おさけのことをゆうな　と
おとうさんは　いった
それなら　お金のことを　いわ
ないようにして　と
おかあさんは　いった
おとうさんは　だまっていた
ぼくも　だまっていた

【中学生の部】

第一席

水巻中三年　喜田景子

働く父

あつい　あつい
こう言いながら　父が帰ってきた
あつい　あつい
こう言いながら　父は服を脱ぐ
上着も下着も　しっとりとして
脱ぎにくそうだ
やっと脱いで　まず冷蔵庫へ
そして風呂
水風呂から上がって　やっと落ちつく
炎天下での大工仕事
一日一度は　シャツを脱いでしぼるという
かたいズボンまで　じっくりぬれるという
そんな上着や下着は二日とは着れない
母の洗濯も大変だ
わたしは
家のなかで　一日中扇風機にあたり
あつい　あつい　とゴロゴロしている
そうしている間にも
父は働いているんだ
びっしょりぬれ
真黒になって
働いているんだ
こんな父には　なかなか休みがない
だが　盆には三日間休みがある
けさ
「あさってから休み」と言って
出かけていった
そして今日も
あつい　あつい　と言いながら
帰ってくるだろう
そしてぬれた服を脱ぐだろう

第二席

水巻中一年　田中伸一

らっきょ

らっきょは
あまずっぱくてとてもおいしい
でも　それにさとうを入れたら
前の味よりもいっそうよい味になる
ぼくは
それを毎日食べている
ときどきらっきょを
べんとうに入れて
学校にもって行くと
みんなは　「くさい　くさい」と
言ったりわらったりする
みんなは
らっきょの味を知らないのだ
一度もたべたことのない人は
一度食べたら
らっきょがうまいと
すぐわかるだろう
それに
柔道や相撲などにも役立つ
それは　らっきょを
食べたら　いきがくさくなる
食べた本人は
何にもかんじないからいいけど
相手の人がきっとくさくなる
そうしたら　はなをつまんだり
顔を横にむけたりするだろう
そこで　すきをみて
たおしたら勝つだろう
だから　らっきょは
とてもおいしい上に
柔道や相撲などにも
役だつから良い

第二席

水巻中一年　吉野百合

虹がかかった時

朝霧が　私を起した
霧の中に　太陽の光がさしこんで
大空には　まるで
今日一日の戸びらのような
いろいろな色がぬって　ある
私を待っているように　すみきって
町の信号機よりも
光り輝くネオンよりも
どこにもない色が
大空の　ためいきかもしれない
それとも
空のいたずらかな？
さあ！　消えないうちに
「いってきます」

児童詩評　白石貞輔先生

小学生の詩は、ほんとうによいものが多かった。
良いと思った点。①素材が豊富になったこと　②自分のことばでうったえている　③物を人にたとえるようないい方（擬人法）が少なくなったこと　④身近かなものをよく見て、詩にしていること。
改めればよいと思った点　①うその表現　②よそ行きことば　③誤まった字。
中学生の詩は小学生の詩に比べて、だいぶん劣る。
悪いと思う点。①観察が粗雑　②素材が概念的に過ぎる。身近かなものに触れ、身近かなものを詩に　③大人の考え方をマネしすぎる。

短歌

選者　石井章先生

天位

大島のここは銀座とわが妻は
子等の土産に貝細工買う
宗像郡宗像町　吉武邦利

（評）歌格正調、詩情一過

俳句

選者　河野静雲先生

天位

坑底に飽かず辞書繰る文化の日
三ツ頭区　三宅　進

（評）勤務の閑を懸命に辞書を繰りつつ勉強している真面目な若い炭礦マンが忍ばれる。場所が坑底であること、文化の日であることが、この句を力あり趣あり且つ精彩ある句にしている。

地位

一本の硬山の木に百舌鳴ける
鯉口区　内田宣良

（評）一本の硬山の木というのがたける鵙の姿とその声をはっきりとして描き出している。

地位

鵙晴や筆跡しかと父癒ゆる
三ツ頭区　三宅　進

（評）筆跡しかとが、父まさに癒えたりの安心感を鵙晴れという季節感によって晴々と明るく実感あるものとして伝えている。

人位

虫の闇ランプ振り合い汽車発たす
遠賀町広渡　吉本伊智朗

（評）炭礦専用の汽車でもあろうか、ランプ振り合いがその素朴な姿を巧みに把握している。

人位

鵙の宮祭仕事の舞台組む
離山者に硬山灯る月る駅
三ツ頭区　三宅　進

（評）秋祭り前の宮の一景趣、季語の鵙がうち晴れた日であることを物語っている。

人位

離山者に硬山灯る月る駅
三ツ頭区　三宅　進

（評）多年住みなれた炭礦の仕事から離れ去る人の出発の月下の駅から灯った硬山を眺めつつ、感じている離愁がうたいだされている。

地位

若き日の思い出嫁に語りつつ
祖母は月見の蕎麦をつくれる
鯉口区　内田宣良

（評）近代文化の団らんは、次第にこのような風景を消していく

地位

女教師の母の腕より預けらる
児の眼はすでにあきらめを知る
三ツ頭区　三宅　進

（評）一種の近代残酷物語り

人位

川原のジェット機音に驚いて
この乳牛ら草を食べおり
遠賀町広渡　吉本伊智朗

人位

転びたる吾子にあつまる幾千の
目を感じけり白熱のリレー
三ツ頭区　三宅　進

人位

閉山の真近き朝の風呂の中
子等の就職のこと話し合う
遠賀町広渡　吉本伊智朗

天位

坑底に飽かず辞書繰る文化の日
三ツ頭区　三宅　進

（評）勤務の閑を懸命に辞書を繰りつつ勉強している真面目な若い炭礦マンが忍ばれる。場所が坑底であること、文化の日であることが、この句を力あり趣あり且つ精彩ある句にしている。

地位

一本の硬山の木に百舌鳴ける
鯉口区　内田宣良

（評）一本の硬山の木というのがたける鵙の姿とその声をはっきりとして描き出している。

地位

鵙晴や筆跡しかと父癒ゆる
三ツ頭区　三宅　進

（評）筆跡しかとが、父まさに癒えたりの安心感を鵙晴れという季節感によって晴々と明るく実感あるものとして伝えている。

人位

虫の闇ランプ振り合い汽車発たす
遠賀町広渡　吉本伊智朗

（評）炭礦専用の汽車でもあろうか、ランプ振り合いがその素朴な姿を巧みに把握している。

人位

鵙の宮祭仕事の舞台組む
離山者に硬山灯る月る駅
三ツ頭区　三宅　進

（評）秋祭り前の宮の一景趣、季語の鵙がうち晴れた日であることを物語っている。

人位

離山者に硬山灯る月る駅
三ツ頭区　三宅　進

（評）多年住みなれた炭礦の仕事から離れ去る人の出発の月下の駅から灯った硬山を眺めつつ、感じている離愁がうたいだされている。

自慢の品々ずらり　下二町住　公民館まつり

下二町営住宅では十一月十二、十三の両日、文化の日を記念して全家庭が参加しての〝公民館まつり〟を盛大に開催しました。この日は、各家庭から自慢の品、ものめずらしい品、各人お得意の書、生花、手芸品、写真、石、盆栽などが公民館いっぱいに展示され、みなさんにぎやかに地区のおまつりを楽しんでいました。

この下二町住公民館は今年の六月、地区の人々の熱意で完成したばかりですが、人々の社交の場に、いろいろな講習会の場にと毎日利用されており、盛んな公民館活動が行なわれています。